

# 博士論文(要約)

論文題目

日本社会学における家理論の形成と展開—その社会像と政治観

氏名 齊藤史朗

## 引用文献について

引用文献は、著作集などの後に編集されたものがある場合でも、原則として初出のものを  
用いた。その理由は、例えば、有賀喜左衛門著作集などは、しばしば編集上のミスや、編者  
の判断による取捨選択に大きな問題がある点が見られるからである。たとえば、有賀は戦前  
には「家制度」という用語を使用していないが、著作集の編集はこの点に関して無頓着であ  
るため、旧稿と新稿がある場合の注のつけ方にこの点を反映していないものがある。また、  
有賀本人が著作集の内容について語っていることが、事実とは異なることもある。（「家につ  
いて」は戦後すぐに発表されたものと、その後に大学セミナーの一冊である「社会学—理  
論篇」に採録されたものとは、内容的に大きな違いがあるし、その違いは有賀理論の展開  
の中でも重要な発展を見せているのだが、本人が内容的にかわらないとしているために、有  
賀理論の年代的变化について誤解を生じさせるおそれがある。）

また、喜多野清一は、他の著者の著作に書いた解説を自らの著作として編集する際に、か  
なり手を加えているので、こちらもただ単純に喜多野の著作を引用すればよいというわけ  
ではない。

鈴木栄太郎著作集については、本文中でも触れた通り、戦前の記述に関して大きな訂正・  
削除の手が入っていて、そのままでは鈴木オリジナルな考えを知ることができない状態  
である。

そういうわけがあつて、本稿では、できる限り、初出のものをあつたが、手に入らない  
ものがあつたので、その場合は著作集から引用をしている。

なお、上記の原典初出主義にともない、漢字・仮名づかいもまた、原典通りを原則とした。  
ただし、「フ」「ふ」などの変態仮名は、便宜のために常用の仮名に変えておいた。また、  
一部、フォントの問題で旧字を反映できていないところがあるが、ご容赦願いたい。

外国語については、流布している翻訳の本文を検討する場合を除いて、筆者が自ら日本語  
訳を作成した。その方が、引用する際の地の文との折り合いをつけやすかったからである。

## 目次

第一章 序にかえて一家と社会、家と政治 .....	4
<b>第一節 家と政治</b> .....	4
1. 非政治的領域としての家 .....	4
2. 社会学における家理論と政治 .....	5
3. 課題の設定 .....	7
<b>第二節 社会像と政治観</b> .....	8
1. 政治の概念 .....	8
2. 政治と政治観 .....	11
<b>第三節 代表的家理論とその政治的含意</b> .....	13
1. 歴史と学説史 .....	13
2. 本論が対象とする家理論の論者たち .....	17
第二章 個人主義による家族国家—戸田貞三の家理論 .....	22
<b>第一節 社会学の誕生と集団としての家族</b> .....	23
1. 戸田社会学と社会問題 .....	23
2. 家族という社会問題 .....	28
3. 戸田家族理論の全体像 .....	32
<b>第二節 比較の中の家族—欧米と日本</b> .....	39
1. 欧米の家族と日本の家族 .....	39
2. 比較と対立—民族の独自性と家族の共通性 .....	42
3. 家族と政治—日本と西洋の違い .....	46
<b>第三節 家と国家—戸田理論における社会統合の問題</b> .....	50
1. 孤立する家族と集団 .....	50
2. 集団と支配関係—個人に立脚した家族国家観 .....	56
3. 戦前と戦後の連続と非連続 .....	60
第三章 平等と政治の過剰—鈴木栄太郎の家と農村 .....	66
<b>第一節 戸田家族理論との対決</b> .....	66
1. 精神としての家 .....	66
2. 集団としての家族 .....	69
3. 家の規範 .....	73
<b>第二節 平等という理想—家・村の規範と構造</b> .....	76
1. 相続権と家内の平等 .....	76
2. 直系家族と家内の平等 .....	79
3. 村を担う家—公民としての平等 .....	82
<b>第三節 参加と包摂—鈴木栄太郎の社会像と政治観</b> .....	86
1. 中間集団の排除と地主支配の否定 .....	86
2. 参加と奉仕—翼賛体制下の農村と家 .....	90

3. 平等と翼賛—政治参加による包摂 .....	93
<b>第四章 家の没歴史化—喜多野清一の家理論 .....</b>	<b>97</b>
<b>第一節 喜多野清一の戦前と戦後 .....</b>	<b>98</b>
1. 社会経済と国家政治 .....	98
2. 階級と経済外的強制 .....	100
3. 農村と経済成長 .....	104
<b>第二節 家と家父長制 .....</b>	<b>108</b>
2. 同族組織と農地改革 .....	112
3. 封建制・家産制・家制度 .....	115
<b>第三節 政治なき継続：喜多野清一の社会像と政治観 .....</b>	<b>121</b>
1. 非歴史的歴史意識—家と同族の非政治化 .....	121
2. 家の存続と国民統合 .....	124
3. 経済発展と戦後政治 .....	128
<b>第五章 親方による支配と庇護—有賀喜左衛門の家理論 .....</b>	<b>133</b>
<b>第一節 支配と平等 .....</b>	<b>133</b>
1. 捨子の話—親子関係と支配関係 .....	133
2. 家と村—同族関係と支配関係 .....	137
3. ヒューマニズムと子方の保護—親方のリーダーシップ .....	139
<b>第二節 家と政治 .....</b>	<b>144</b>
1. 政治という災い .....	144
2. 公法と私法—政治的単位と家 .....	146
3. 鉢植えの武士と開発領主 .....	150
<b>第三節 支配と抵抗—闘う親方百姓 .....</b>	<b>152</b>
1. 支配と自律 .....	152
2. 公と私の入れ子構造 .....	156
3. 家の自治と生活保障 .....	160
4. 親方のリーダーシップと家の形成 .....	165
<b>第六章 家の家庭化と社会の自律—中野卓と「うち」の家理論 .....</b>	<b>171</b>
<b>第一節 社会と歴史 .....</b>	<b>171</b>
1. イデオロギーとしての「家」 .....	171
2. 家と血縁 .....	174
3. 同族と地域 .....	177
<b>第二節 『商家同族団の研究』の構成—中野卓の家族本質論 .....</b>	<b>182</b>
1. 『商家同族団の研究』の受容と伝承 .....	182
2. 『商家同族団の研究』と『家族構成』 .....	187
3. 中野卓の家族本質論 .....	192
<b>第三節 「社会」の自律と国家への抵抗—中野卓の社会像と政治像 .....</b>	<b>197</b>
1. 平等と支配—リーダーシップをめぐる .....	197
2. 自然村と行政村—村落社会における自律と他律 .....	201

3.非政治的領域としての社会の自律 .....	204
<b>第七章 結論 家理論における昭和の終わり .....</b>	<b>213</b>
<b>第一節 社会学における戦前の家理論と政治 .....</b>	<b>213</b>
<b>第二節 戦前の家理論を「非政治的」なものとする理解は、いつ、どのようにして生まれたのか.....</b>	<b>216</b>
<b>第三節 社会学における家理論が、戦後のものばかりでなく、戦前に展開されたものもまた非政治的であったという学説史的理解が形成されるのに大きな影響を与えた要因としては何が考えられるのか .....</b>	<b>218</b>
<b>文献表 .....</b>	<b>225</b>

5年以内に出版予定があるため、内容は省略。

## 文献表

### A

- Altenbockum; Jasper von, "Wilhelm Heinrich Riehl 1823-1897 : Sozialwissenschaft zwischen Kulturgeschichte und Ethnographie" 1994 Köln Böhlau
- 青山道夫、「法律婚主義と事実婚主義」『中川善之助教授還暦記念 家族法大系Ⅱ婚姻』  
1959年 東京 有斐閣
- 、「日本の「家」の本質について」福島正夫編『家族 政策と法 7 近代日本の家族観』1976年 東京 東京大学出版会
- 赤川学、『構築主義を再構築する』2006年 東京 勁草書房
- 有賀喜左衛門、「生きやうではないか」『地上』1-2 1919年 長野 地上社
- 、「吹雪」『創作』2-4 1923年 東京 創作社
- 、「「炉辺見聞」『民族』1-2 1925年 東京 民族発行所
- 、「炉辺見聞」『民族』1-3 1925年 東京 民族発行所
- 、「みろり雑考」『旅と伝説』9-4 1926年 東京 三元社
- 、「炉辺見聞」『民族』4-3 1928年 東京 民族発行所
- 、「火の玉と狐火」『民俗学』1-2 1929年 東京 岡書院
- 、「民俗学の本願」『民俗学』1-3 1929年 東京 民俗學會
- 、「村の人の話」『民俗学』1-5 1929年 東京 民俗學會
- 、「村の人の話」『民俗学』1-6 1929年 東京 民俗學會
- 、「村の生活と山林」『郷土』1-3 1931年 東京 郷土発行所
- 、「村の見方」講演（筆記は『有賀喜左衛門著作集Ⅷ』1969年）
- 、「村の家」『葦原』特輯号 1932年 謄写版（『有賀喜左衛門著作集Ⅳ』1967年）
- 、「捨て子の話」『法律新聞』3508号～3520号 1932年 東京 法律新聞社
- 、「小作・ユイ・他所者」『民俗学』5-4 1933年 東京 岡書院
- 、「名子の賦役—小作料の原義—上」『社会経済史学』3-7  
1933年 東京 岩波書店
- 、「名子の賦役—小作料の原義—下」『社会経済史学』3-10  
1934年 東京 岩波書店
- 、「村の記録 附、熊谷家傳記のこと」『ドルメン』3-8 1934年 東京 岡書院
- 、「不幸音信帳から見た村の生活—信州上伊那郡朝日村を中心として—」  
『歴史学研究』2-4 1934年 東京 歴史学研究会
- 、「若者仲間と婚姻」『社会経済史学』4-11 4-12 5-1 5-2  
1935年 東京 岩波書店
- 、「田植と村の生活組織」『民族学研究』1-3 1935年 東京 三省堂
- 、「タウト氏のみた白川村」飛騨考古土俗学会編『ひだびと』  
1936年 高山町（岐阜県）飛騨考古土俗學會

- 有賀喜左衛門、「菅江真澄翁の墓(一)」『帝國大學新聞』第六百七号 1936年 東京 帝国大学新聞社
- 、「菅江真澄翁の墓(二)」『帝國大學新聞』第六百八号 1936年 東京 帝国大学新聞社
- 、「みろり雑考」『旅と伝説』9-4 1936年 東京 三元社
- 、「タウト氏の観た白川村」『ひだびと』4-11 1936年 高山町 (岐阜県) 飛騨考古土俗學會
- 、「さなぶり—田植と村の生活組織—」『民族学研究』4-1 4-2 1937年 東京 三省堂
- 、「結納と労働組織」『社会経済史学』6-3 6-4 6-51 1938年 東京 河出書房
- 、『農村社会の研究—名子の賦役』1938年 東京 河出書房
- 、『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』1939年 東京 河出書房
- 、「家族制度と労働組織」『日本社会学会年報 社会学 (第八輯)』1941年 東京 岩波書店
- 、「日本家族制度の特質について」『日本社会学会年報 社会学 (第九輯)』1943年 東京 日本社会学会
- 、「日本農村の性格について」産業組合中央会編 『新農村建設の基本問題—第六回産業組合問題研究会報告書—』1943年 東京 産業組合中央会
- 、「上代の家と村落」東亜社会研究会編『東亜社会研究』第一卷 1943年 東京 生活社
- 、『日本家族制度と小作制度—「農村社会の研究」改訂版』1943年 東京 河出書房
- 、「日本農村における封建制」『社会学研究』1-2 1947年 東京 高山書院
- 、「社会関係の基礎構造と類型の意味」『社会学研究』1947年 東京 高山書院
- 、「同族と親族」『日本民俗学のために』第2卷 1947年 東京 民間伝承の会
- 、「社会秩序」『社会と学校』2-2 1948年 東京 金子書房
- 、「奈良時代の戸籍と計帳」『社会経済史学』25-2 1948年 東京 世界書院
- 、「都市社会学の課題—村落社会学と関連して—」民族文化調査会編 『社会調査の理論と実際』1948年 東京 青山書院
- 、『村落生活—村の生活組織—』1948年 東京 国立書院
- 、『日本婚姻史論』1948年 東京 日光書院
- 、「社会秩序」『社会と学校』2-2 1948年 東京 金子書房
- 、「親族呼称の本質に関する一考察—漢民族の親族呼称を通して—」戸田貞三博士還暦祝賀記念論文集『現代社会学の課題』1949年 東京 弘文堂



- 有賀喜左衛門、「家について」八学会連合編『人文科学の諸問題』1949年 東京 関書院
- 、『封建遺制の分析』1949年 東京 中央小論社
- 、「日本社会構造における階層制の問題」『民族学研究』14-4 1950年  
東京 岡書院
- 、「日本の家」日本人類学会編『日本民族』1952年 東京 岩波書店
- 、「民俗資料の意味—調査資料—」金田一京介博士古希記念『言語民俗論叢』  
1953年 東京 三省堂出版
- 、「対馬封建制度の諸問題—木庭と間高、地方知行、加冠—」  
八学会連合対馬共同調査委員会編『対馬の自然と分化』1954年 東京  
古今書院
- 、「義理と人情」『現代道德講座(三)』1955年 東京 河出書房
- 、「家制度と社会福祉」全国社会福祉協議会編『社会事業』38-9  
1955年 東京 全国社会福祉協議会
- 、「全体社会研究の必要」林恵海教授還暦記念論文集『日本社会学の課題』  
1956年 東京 有斐閣
- 、「村落共同体と家」村落社会研究会編『村落共同体の構造分析』  
1956年 東京 時潮社
- 、「ユイの意味とその変化」『民族学研究』21-4 1957年 東京 岡書院
- 、「大家族崩壊以後—南部二戸郡石神—」『信濃』10-5 1958年 長野  
信濃史学会（『有賀喜左衛門著作集 III』1967年）
- 、「村落の概念について」『哲学』35 1958年 東京 三田哲学会
- 、「家について」日高六郎編『社会学論集—理論篇』  
1959年 東京 河出書房新社
- 、「日本における先祖の観念—家の系譜と家の本末の系譜と—」岡田謙・  
喜多野清一編『家—その構造分析』1959年 東京 創文社
- 、「家族と家」『哲学』38 集 1958年 東京 三田哲学会
- 、「同族団とその変化—はしがき—」『社会学評論』46 1962年 東京  
日本社会学会
- 、『日本の家族』1965年 東京 至文堂
- 、「家族理論の家への適用—喜多野清一氏の『日本の家と家族制度』を讀ん  
で」『社会学評論』第19巻第2号 1968年 東京 日本社会学会
- 、「社会学と私」『現代社会学大系 月報(一)』1969年 東京 青木書店
- 、「家と奉公人」喜多野清一博士古希記念論文集『村落構造と親族組織』  
1973年 東京 未来社
- 、『「聾人考」と柳田國男』『季刊 柳田國男研究』八号 1975年 東京  
白鯨社
- 、『一つの日本文化論—柳田國男と関連して』1976年 東京 未来社
- 、「民族の心を求めて」『私の自叙伝(一)』1979年 東京  
日本放送協会出版

有賀喜左衛門、「有賀喜左衛門先生最後の講話」北川隆吉編『有賀喜左衛門研究＊社会学の思想・理論・方法＊』2000年 東京 至文堂

—————、『有賀喜左衛門著作集Ⅲ 大家族制度と名子制度』1967年 東京 未来社

—————、『有賀喜左衛門著作集Ⅳ封建遺制と近代化』1967年 東京 未来社

—————、『有賀喜左衛門著作集Ⅴ村の生活組織』1968年 東京 未来社

—————、『有賀喜左衛門著作集Ⅵ婚姻・労働・若者』1968年 東京 未来社

—————、『有賀喜左衛門著作集Ⅶ社会史の諸問題』1969年 東京 未来社

—————、『有賀喜左衛門著作集Ⅷ民俗学・社会学方法論』1969年 東京 未来社

—————、『有賀喜左衛門著作集Ⅸ 家と親分子分』1970年 東京 未来社

—————、『有賀喜左衛門著作集Ⅹ 同族と村落』1971年 東京 未来社

—————、『有賀喜左衛門著作集ⅩⅠ 家の歴史・その他』1971年 東京 未来社

—————、『有賀喜左衛門著作集ⅩⅡ 文明・文化・文学』2001年 東京 未来社

有賀喜左衛門著 中野卓編、『文明・文化・文学』1980年 東京 御茶ノ水書房

有地亨、『近代日本の家族観 明治篇』1977年 東京 弘文堂

有馬祐政・秋山梧庵編、『武士道家訓集』1907年 東京 博文館

## B

坂野潤治編著、『自由と平等の昭和史』2009年 東京

—————、『<階級>の日本近代史』2014年 東京

Böckenförde; Ernst Wolfgang, “Die deutsche verfassungsgeschichtliche Forschung im 19.Jahrhundert” Zweite Auflage, 1995 Berlin Duncker&Humblot

Brunner ; Otto, „Land und Herrschaft 5.Aufl.“  
1965 Darmstadt Wissenschaftliche Buchgesellschaft

—————Moderner Verfassungsbegriff und mittelalterliche Verfassungsgeschichte’ in „Mitteilungen des Österreichischen Instituts für Geschichtsforschung“ XIV.Erg-Band Innsbruck Universität-Verlag Wagner

—————, „Neue Wege der Verfassungs- und Sozialgeschichte“, 1956  
Göttingen Vandenhoeck & Ruprecht

ブルンナー; オットー、『ヨーロッパ その歴史と精神』石井他訳 1974年 東京 岩波書店

## D

Dahl ; Robert A, “Polyarchy , participation and opposition” 1971 Yale University Press, New Haven

R.ドーア著 青井和夫・塚本哲人訳、『都市の日本人』1962年 東京 岩波書店

Durkheim;Émile, “De la division du travail social” 9<sup>e</sup> édition 1973 Paris  
Presse Universitaires de France

## **E**

遠藤浩、「分家についての諸問題」『学習院大学政経学部研究年報』1巻  
1953年 東京 学習院大学政経學會

## **F**

Fichte,;Johan Gottlieb, 'Reden an die deutsche Nation' in "Fichtes Werke"Bd.VII 1971  
Berlin Walter de Gruyter & Co.

藤井勝、「近世農民の家と家父長制」永原慶二・住谷一彦・鎌田浩編『家と家父長制』  
1992年 東京 早稲田大学出版部

藤井勝、『家と同族の歴史社会学』1997年 東京 刀水書房

福島正夫編、『戸籍制度と「家」制度』1959年 東京 東京大学出版会

福島正夫、『日本資本主義と「家」制度』1967年 東京 東京大学出版会

船橋春俊、『組織の存立構造と両義性論—社会学理論の重層的的研究』2010年 東京 東信社

## **G**

Gadamer; Hans Georg, "Wahrheit und Methode" 1960 Tübingen J.C.B.Mohr

Grimm;Dieter, 'Verfassung(2)' in "Geschichtliche Grundbegriffe" Bd.VI hrg.

von Otto Brunner, Werner Conze, Reinhard Koselleck und Rudolf  
Walthe 1990 Stuttgart Klett-Cotta

## **H**

長谷川善計、「有賀社会学の理論形成の諸特徴—柳田民俗学との関連において—」

『新しい社会学のために』12号 13号 15号 1977年 1978年 京都  
現代社会研究会

—————、「同族団の初源的形態と二つの家系譜—有賀喜左衛門の同族団理論の再検討—」

『神戸大学文学部紀要』9号 10号 1981年 1983年 神戸 神戸大学文学部

—————、「社会学における家と家父長制」『比較家族史研究2』1987年 東京 弘文堂

長谷川善計・藤井勝・竹内隆夫・野崎敏郎、『日本社会の基層構造—家・同族・村落の研究  
—』1991年 京都 法律文化社

平賀明彦、『戦前日本農業政策史の研究』2003年 東京 日本経済評論社

平野敏正、「有賀喜左衛門の家理論」『家族史研究3』1981年 東京 大月書店

Hegel;G.W.F.,„Phänomenologie des Geistes" 1977 Frankfurt am Main Suhrkamp

—————,"Vorlesung über die Philosophie der Geschichte" 1980

Frankfurt am Main Suhrkamp

—————,"Grundlinien der Philosophie des Rechts" 1978 Frankfurt am Main

Suhrkamp

Heidegger ; Martin, „Sein und Zeit“ 1927 Tübingen Niemeyer

- 平山朝治、『イエ社会と個人主義』1995年 東京 日本経済新聞社
- Horkheimer;Max, „Allgemeiner Teil’ in „Studien über Autorität und Familie“ hrg.  
Von Max Horkheimer, 1936 Paris F. Alcan
- 星野英一、『民法論集第三卷』1972年 東京 有斐閣
- Hoffmann; Julius, „Die „Hausväterliteratur“ und die „Predigten über den christlichen  
Hausstand“ 1959 Berlin J. Beltz
- 堀米庸三、「中世の家族観」青山道夫・竹田旦・有地亨・江守五夫・松原治郎編  
『講座家族8 家族観の系譜 総索引』1974年 東京 弘文堂
- 法務大臣官房司法法制調査部監修、『法典調査会民法議事速記録 第五巻』  
1984年 東京 商事法務研究会
- 法務大臣官房司法法制調査部監修、『法典調査会民法議事速記録 第六巻』  
1984年 東京 商事法務研究会
- 法務大臣官房司法法制調査部監修、『法典調査会民法議事速記録 第七巻』  
1984年 東京 商事法務研究会
- 穂積重遠、『親族法』1933年 東京 岩波書店
- 穂積重遠・中川善之助編、『家族制度全集』史論篇1～5、法律篇1～5 1937年～1938年  
東京 河出書房
- 穂積八束、『穂積八束博士論文集 増補改版』1943年 東京 有斐閣
- 本多真隆、「戦後民主化と家族の情緒」『家族社会学研究』第25巻第1号 2013 東京  
家族社会学セミナー
- 本多真隆、「家族研究における「ピエテート」概念受容の諸相—戸田貞三と川島武宜の家  
族論にみる情緒と権威の関連性—」『家族研究年報』第38号 2013年 東京  
家族問題研究会
- 、「有賀喜左衛門の民主化論—「家」の民主化と「家族」の民主化」  
『家族研究年報』第40号 2015年 東京 家族問題研究会
- 堀内節編著、『家事審判制度の研究』1970年 東京 日本比較法研究所
- 、『続・家事審判制度の研究』1976年 東京 日本比較法研究所
- Husserl,; Edmund,“Husserliana Bd.VI Die Krisis der europäischen Wissenschaften  
und die transzendente Phänomenologie “ 1954 Haag Nijhof

## I

- 井ヶ田良治、「近世村落身分秩序の諸矛盾—丹波国南桑田郡保津村—」  
『近世村落の身分構造』1984年 東京 国書刊行会
- 井上哲二郎編著、『國民教育と家族制度』1911年 東京 目黒書店
- 石田雄、『明治政治思想史研究』1954年 東京 未来社
- 、『近代日本政治構造の研究』1956年 東京 未来社
- 石井紫郎、『日本国制史研究 I 権力と土地所有』1963年 東京 東京大学出版会
- 、「『いえ』と『家父長制』概念」『社会科学の方法』4-12  
1971年 東京 御茶ノ水書房

- 石井紫郎、『日本国制史研究Ⅱ 日本人の国家生活』1986年 東京 東京大学出版会
- 石井紫郎編、『日本近代法史講義』1972年 東京 青林書院新社
- 石井紫郎編著、『近世武家思想』1974年 東京 岩波書店
- 石井進・石母田正・笠松宏至・勝俣鎮夫・佐藤進一編著、『中世政治社会思想 上・下』  
1972年 東京 岩波書店
- 石井良助『家と戸籍の歴史』1981年 東京 創文社
- 石黒史郎、「戸田貞三の初期著作に見出される家族：社会改良、統計法と近代文明社会における家族」『家族社会学研究』19巻1号 2007年 東京  
家族社会学セミナー
- 石黒史郎、「有賀喜左衛門初期著作にみる方法論的探求と家族の問題化」  
『家族社会学研究』22巻2号 2010年 東京 家族社会学セミナー
- 石部雅亮、「プロイセン国家の家族観」青山道夫・竹田且・有地亨・江守五夫・松原治郎編  
『講座家族8 家族観の系譜 総索引』1974年 東京 弘文堂
- 、「ドイツ・三月前期の家族法」『家族史研究5』1982年 東京 大月書店
- 、「一八世紀ドイツにおける「家長権」の観念について」永原慶二・住谷一彦・鎌  
田浩編『家と家父長制』1992年 東京 早稲田大学出版部
- 磯野誠一、「明治民法の変遷」中川善之助・青山道夫・玉城肇・福島正夫・兼子一・川島武  
宜編『家族問題と家族法Ⅰ 家族』1957年 東京 酒井書店
- 、「民法改正（法体制再編期）」鶴飼信成・福島正夫・川島武宜・辻清明編『講座  
日本近代法発達史 2』1958年 東京 勁草書房
- 磯野誠一・磯野富士子、『家族制度』1958年 東京 岩波書店
- 伊藤幹治、『家族国家観の人類学』1982年 京都 ミネルヴァ書房
- 稲本洋之助、「市民革命の家族観—フランス革命下の家族法改革を素材として—」青山道  
夫・竹田且・有地亨・江守五夫・松原治郎編『講座家族8 家族観の系譜 総索  
引』1974年 東京 弘文堂
- 、「フランス近代の家族と法」『家族史研究5』1982年 東京 大月書店
- 稲本洋之助編訳、『フランス民法典第一篇—その原初規定（一八〇四）と原行規定（一九七  
一）—』1972年 東京 「家」制度研究会
- 井上光貞、『日本古代史の諸問題』1949年 東京 思索社
- 入江宏、『近世庶民家訓の研究』1996年 東京 多賀出版
- 岩崎祖堂、『日本現代富豪名門の家憲』1908年 丸山舎書籍部

## J

- 慈円、『愚管抄 日本古典文学大系』1967年 東京 岩波書店

## K

- 柿崎京一、「「家」研究ノート—M・ウエーバーの「ピエテート」に関連して—」  
『社会科学の方法』14巻5号 1981年 東京 御茶ノ水書房

- 風早八二十編著、『全国民事慣例類集』1944年 東京 日本評論社
- 笠谷和比古、「序論 「家」の概念とその比較史的考察」『公家と武家 II 「家」の比較文  
明史的考察』1999年 京都 思文閣出版
- 加藤一郎・星野英一・米倉明・平井宜雄・石田穰編、『法律学教材民法6 親族相続』  
1979年 東京 東京大学出版会
- 鹿野政直、『戦前・家の思想』1983年 東京 創文社
- 鎌田浩、『幕藩体制における武士家族法』1970年 東京 成文堂
- 、「法史学界における家父長制論争」『比較家族史研究2』1987年 東京 弘文堂
- 、「家父長制の理論」永原慶二・住谷一彦・鎌田浩編『家と家父長制』1992年  
東京 早稲田大学出版部
- 川島武宜、『日本社会の家族的構成』1948年 東京 岩波書店
- 、「イデオロギーとしての家族制度」1957年 東京 岩波書店
- 河田正矩、『家業道徳論』元文五年 『通俗経済文庫 卷九』1916年 東京 明治文献
- 河村望、『日本社会学史研究(上)』1973年 東京 人間の科学社
- 、『日本社会学史研究(下)』1975年 東京 人間の科学社
- 川本彰、『近代文学に於ける「家」の構造 その社会学的考察』1973年 東京 社会思想社
- 木戸功、『概念としての家族』2010年 東京 新泉社
- 北川隆吉編、『有賀喜左衛門研究\*社会学の思想・理論・方法\*』2000年 東京 至文堂
- 喜多野清一、「建設への一道標—鈴木榮太郎氏著『農村社会学史』を読む—」  
『帝國大學新聞』第四百六十八號 1933年 東京 帝國大學新聞社
- 、「農民階級構成の史的段階」『社会学』第一輯 1933年 東京 岩波書店
- 、「信州更科村若宮の同族団」『民族学研究』3-3 1937年 東京 日本民族学会
- 、「新刊紹介 有賀喜左衛門著 農村社会の研究」『民族学研究』5-4  
1939年 東京 日本民族学会
- 、「農村社会調査における樞軸的視點」『郷土教育』第三十號 1933年 東京  
刀江書院
- 、「昭和五年國勢調査にあらはれたる日本農業」『社会政策時報』  
第百五十六號  
1933年 東京 協調會
- 、「昭和五年國勢調査にあらはれたる日本農業 (續篇)」『社会政策時報』  
第百六十八號 1934年 東京 協調會
- 、「昭和五年國勢調査にあらはれたる日本農業 (續篇) (下)」『社会政策時報』  
第百七十號 1934年 東京 協調會
- 、「社会調査の基本問題」『社会事業』第十八卷第十二號 1935年 東京  
社会事業研究所
- 、「米國に於ける農村社会学の發達」『社会学』第四輯 1936年 東京  
岩波書店
- 、「農村社会学文献目録」『社会学』第四輯 1936年 東京 岩波書店

- 喜多野清一、「農村家族構造の分析に就て」『社會事業研究』第二十四卷第四號 1936年  
大阪 社會事業研究会事務所
- 、「大阪市近郊農村の生活調査報告を讀みて」『社會事業研究』第二十五卷  
第九號 1937年 大阪 社會事業研究会事務所
- 、「日本の新傾向(上) 新明教授「ゲマインシャフト」等」『帝國大學新聞』  
第六百九十七號 1937年 東京 帝國大學新聞社
- 、「日本の新傾向(下) 戸田・鈴木教授等の近著に就て」『帝國大學新聞』  
第六百九十八號 1937年 東京 帝國大學新聞社
- 、「信州更科村若宮の同族団」『民族學研究』第三卷第三號 1937年 東京  
三省堂
- 、「柳田國男氏輯「山村生活の研究」」『東京朝日新聞』  
第一萬八千六百三十二號 1938年 東京 朝日新聞社
- 、「實際主義的研究の興隆 日本社會學會に望みたきこと」『帝國大學新聞』  
第七百四十九號 1939年 東京 帝國大學新聞社
- 、「舊會津藩山三郷の分家取斗仕法」『民族學研究』第五卷第二號 1939年  
東京 三省堂
- 、「有賀喜左衛門著「農村社會の研究」」『民族學研究』第五卷第四號  
1939年 東京 三省堂
- 、「國勢調査の意義」『帝國大學新聞』第八百二十五號 1940年 東京  
帝國大學新聞社
- 、「甲州山村の同族組織と親方子方慣行」『民族学年報 第二卷』  
1940年 東京 三省堂
- 、「具體的方法論の確立 「日本農村社會學原理」」『帝國大學新聞』  
第八百四十號 1941年 東京 帝國大學新聞社
- 、「同族組織と親方子方慣行資料」『民族学年報 第三卷』1941年 東京  
三省堂
- 、「民主主義と農村」『東京新聞』第一千四百四十四号 1945年 東京  
東京新聞社
- 、「農村の民主化 英國の地方政治」『東京新聞』第一千三百十七号 1946年  
東京 東京新聞社
- 、「農村の民主化 生活密着の指導」『東京新聞』第一千三百十八号 1946年  
東京 東京新聞社
- 、「農村の民主化 徐々に且確實に」 『東京新聞』第一千三百十九号  
1946年 東京 東京新聞社
- 、「村への愛に立脚して」『新青年文化』第2号 1946年 東京  
新青年問題懇話会
- 、「變貌する農村」『評論』1946年 東京 河出書房
- 、「科学的分析の要=農村・家族制度の調査に期待=」『帝国大学新聞』994号  
1946年 東京 不二出版
- 、「同族団資料」『民族學研究』新三卷二輯 1947年 東京 彰考書院

- 喜多野清一、「及川宏くんの略歴と業績」『民族學研究』新三卷二輯 1947年 東京 彰考書院
- 、「町人請負新田に於ける小作関係」『社会学研究』1947年 東京 高山書院
- 、「社會調査法(1),(2)」『社會圈』一卷一号・二号 1947年 東京 青山書院
- 、「日本の村と家に關する二、三の問題」『社會と學校』一卷二号 1947年 東京 金子書房
- 、「社會調査法の諸問題」『社會と學校』二卷六号 1948年 東京 金子書房
- 、「社會調査の方法」東京社会科学研究所編『現代の社會學』第一卷 1948年 東京 実業之日本社
- 、「農村問題—農地改革を中心として—」田邊壽利編『社会学体系 都市と農村』1948年 東京 国立書院
- 、「新田開發村の同族組織」『戸田貞三博士還曆祝賀記念論文集 現代社会学の諸問題』1949年 東京 弘文堂
- 、「アメリカ農村社会学における共同体研究の展開」『季刊 社會學』第三卷 1949年 東京 同文館
- 、「同族組織と封建遺制」日本人文科学会編『封建遺制』1951年 東京 有斐閣
- 、「対馬村落の研究(一)」『九州大学九州文化史研究所紀要』第一号 1951年 福岡 九州大学九州文化史研究所
- 、「小作争議」『日本社會民俗辞典』第一卷 1952年 東京 誠文堂新光社
- 、「農村の文化運動(上)(下)」『東京新聞』第3591号・3592号 1952年 東京 東京新聞社
- 、「対馬村落社会構造の諸問題」九學會年報第四集『漁民と對馬』1952年 京都 關書院
- 、「農村教育」『教育研究事典』1954年 東京 金子書房
- 、「二、三の主要な發展線について—理論と方法、社会学—」『村落社会研究会年報』第一卷 1954年 東京 時潮社
- 、「農村社會とらえ方 続」『經濟研究資料』第八二号 1954年 東京 農林省農林經濟局經濟研究室
- 、「社会学」村落社会研究会編『村落研究の成果と課題』1954年 時潮社
- 、「新しいモノグラフへの期待」『林恵海教授還曆記念論文集』1956年 東京 有斐閣
- 、「村落共同体に關する覚え書」『村落社会研究会年報』第三卷 1956年 東京 時潮社
- 、「同族の相互扶助」中川善之助・青山道夫・玉城肇・福島正夫・兼子一・川島武宜編『家族問題と家族法V 扶養』1958年 東京 酒井書店
- 、「同族団の構成と協助の態様」『大阪大学文学部創立十周年記念論叢』1959年 東京 創文社
- 、「同族」岩村忍・関敬吾編『日本の民族・文化—日本人の人類』1959年 東京 講談社



- 喜多野清一、「身分と家格」『日本民俗大系 4 社会と民俗二』 1959年 東京 平凡社
- 、「親方子方」『日本民俗大系 4 社会と民俗二』 1959年 東京 平凡社
- 、「江戸中期甲州山村の家族構成」喜多野清一・岡田謙編『家—その構造分析—』 1959年 東京 創文社
- 、「甲州山村の親方子方— 桐原村大垣戸のデルキとオヤブン・コブン—」『大阪大学文学部紀要』七号 1960年 大阪大学文学部
- 、「社会学と民俗学」『日本民俗学体系 1 民俗学の成立と展開』 1960年 東京 平凡社
- 、「同族における系譜関係の意味」『九州大学九州文化研究所創立ニ五周年記念論文集』 1961年 福岡 九州文化史研究所
- 、「日本の家と家族」『大阪大学文学部紀要』 11巻 1965年 大阪 大阪大学
- 、「及川宏「同族組織と村落生活」解説」 及川宏著『同族組織と村落生活』 1967年 東京 未来社
- 、「鈴木農村社会学における村と家」 『鈴木栄太郎著作集 II』 1968年 東京 未来社
- 、「解説—日本における家族社会学の定礎者戸田貞三博士」 戸田貞三『新版 家族構成』 1970年 東京 新泉社
- 、「日本の村と家」『社会学年誌 12』 1971年 東京 早稲田大学社会学会
- 、「社会学と私」『現代社会学大系第六回配本月報』 1971年 東京 青木書店
- 、「鈴木栄太郎博士の家族論」武田良三博士古希記念論文集『近代社会と社会学』 1971年 東京 早稲田大学出版会
- 、「はじめに」喜多野清一編『「家」と親族組織』 1975年 東京 早稲田大学出版会
- 、「デルイとオヤブン・コブン—山梨県北都留郡上野原町大垣外—」喜多野清一・正岡寛司編著、『「家」と親族組織』 1975年 東京 早稲田大学出版部
- 、『家と同族の基礎理論』 1976年 東京 未来社
- 、「山陰農村における子方従属の一事例」『地域社会学の諸問題』 1979年 京都 晃洋書房
- 、「日本の家族史研究によせて」『家族史研究 1』 1980年 東京 大月書店
- 喜多野誠一編『家族・同族・村落』 1983年 東京 早稲田大学出版部
- 喜多野清一・岡田謙編『家—その構造分析—』 1959年 東京 創文社
- 喜多野誠一・住谷一彦「日本の家と家族—有賀・喜多野論争の問題点—」『思想』 第 527号 1968年 東京 岩波書店
- 喜多野清一博士古希記念論文集編集委員会編、『村落構造と親族組織』 1973年 東京 未来社
- 喜多野清一・正岡寛司編著『「家」と親族組織』 1975年 東京 早稲田大学出版部
- 小平権一、「農山漁村経済更生計畫の大要」『郷土教育』 第 28号 1931年
- 小山隆・牧野巽・岡田謙・喜多野清一、「家族研究の回顧と展望（座談会）」 山室周平・姫岡勤編『現代家族の社会学』 1970年 東京 培風館

Koselleck; Reinhart, ‚Erfahrungsraum< und >Erwartungshorizont< —zwei historische Kategorien‘ in „Vergangene Zukunft“ 1979 Frankfurt am Main Suhrkamp

Koselleck; Reinhart, ‚Die Auflösund des Hauses als ständischer Herrschaftseinheit. Anmerkungen zum Rechtswandel von Haus, Familie und Gesinde in Preußen zwischen der Französischen Revolution und 1848‘ in “Familie zwischen Tradition und Moderne” hrg. von Neithard Bulst, Joseph Goy und Jochen Hoock, 1981 Göttingen Vandenhoeck & Ruprecht

—————, ‚Begriffsgeschichtliche Probleme der Verfassungsgeschichtsschreibung‘ in “Gegenstand und Begriffe der Verfassungsgeschichtsschreibung” 1983 Berlin Duncker&Hunblot

Kroeschell; Karl, "Haus und Herrschaft im frühen deutschen Recht: ein methodischer Versuch" 1968 Göttingen Schwartz

黒崎八州次良, 「ある成熟—青年 有賀喜左衛門の場合—」『人文科学論集』 第 20 集  
1986 年 長野 信州大学人文学部

小山隆・牧野巽・岡田謙・喜多野清一, 「家族研究の回顧と展望 (座談会)」『現代家族の社会学—成果と課題』 1970 年 東京 培風館

小山隆編, 『現代家族の研究』 1960 年 東京 弘文堂

## L

Luhmann; Niklas, ‚Gesellschaftliche Struktur und semantische Tradition‘ in „Gesellschaftsstruktur und Semantik“ 1980 Frankfurt am Main Suhrkamp

## M

Manheim; Ernst, ‚Beiträge zu einer Geschichte der autoritären Familie‘ in „Studien über Autorität und Familie“ hrg. Von Max Horkheimer, 1936 Paris F. Alcan

Meinecke; Friedrich, „Die Idee der Staatsräson“ 1924 München Wien R. Oldenbourg

牧原憲夫, 『客分と国民のあいだ』 1998 年 東京 吉川弘文館

正岡寛司, 「家研究の展開と課題—有賀喜左衛門および鈴木栄太郎の「家」研究から—」  
『家族史研究 3』 1981 年 東京 大月書店

栢田忠雄, 「わが国農村社会学における「家」理論の形成と展開—喜多野清一の「家」理論を中心として—」『山形大学紀要』 4-1 4-3 1972 年 1973 年 山形山形大学

松島静雄・中野卓, 『日本社会要論』 1958 年 東京 東京大学出版会

松田忍, 『系統農会と近代日本』 2012 年 東京 勁草書房

丸山侃堂・今村南史 『丁稚制度の研究』 1912 年 東京 政教社

丸山真男, 『日本の思想』 1961 年 東京 岩波書店

—————, 『増補版 現代政治の思想と行動』 1964 年 東京 未来社

- 丸山真男、『丸山真男講義録』第二冊 1999年 東京 岩波書店
- 蓑輪明子、「一九二〇年代の「家」制度改正論—臨時法制審議会の民法改正構想を素材に—」『一橋社会科学』第5号 2008年 東京 一橋大学大学院社会科学研究科
- 三井文庫編、「宗竺遺書」『三井事業史 資料編1』1973年 東京 三井文庫
- 三井文庫編、『三井事業史 資料編3』1974年 東京 三井文庫
- 光吉利之、「書評 中野卓『商家同族団の研究』」『社会学評論』第17巻第1号 1966年 東京 日本社会学会
- 光吉利之・松本通晴・正岡寛司編、『リーディングス 日本の社会学3 伝統家族』1986年 東京 東京大学出版会
- 宮本又次、『株仲間の研究』1938年 東京 有斐閣
- 宮本又次、『近世商人意識の研究』1943年 東京 有斐閣
- 宮沢俊義、『憲法の原理』1967年 東京 岩波書店
- 水林彪・大津透・新田一郎・大藤修編、『新体系日本史2 法社会史』2001年 東京 山川出版社
- Mitterauer; Michael und Sieder ;Reinhard,“Vom Patriarchat zur Partnerschaft : zum Strukturwandel der Familie“ 1977 München C.H. Beck
- 森岡清美、『家の変貌と先祖の祭』1984年 東京 日本基督教団出版局
- 、「1920年代の家族変動論」『現代家族変動論』1993年 京都 ミネルヴァ書房
- 、「家憲と先祖祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告 41』1992年 佐倉 国立歴史民俗博物館
- 、『発展する家族社会学』2005年 東京 有斐閣
- 、「私が出会った家族研究の四先達—鈴木・有賀・小山・喜多野の諸先生—」『家族社会学研究』第23巻第1号 2011年 東京 家族社会学セミナー
- 森岡清美・望月嵩、『新しい家族社会学』1983年 東京 培風館
- 森田政裕、「有賀喜左衛門の「家」理論とその論理構造—戸田貞三との対比で—」『社会学評論』第28巻第3号 1978年 東京 日本社会学会
- 森謙二、「政治学者神島二郎教授の学説」『比較家族史研究1』1986年 東京 弘文堂
- 、「家（家族）と村の法秩序」水林彪・大津透・新田一郎・大藤修編『新体系日本史2 法社会史』2001年 東京 山川出版社
- 森武麿、『戦時日本農村社会の研究』1999年 東京 東京大学出版会
- 、『戦間期の日本農村社会』2005年 東京 日本経済評論社
- 森武麿編、『近代農民運動と支配体制』1985年 東京 柏書房
- 森田政裕、「有賀喜左衛門の「家」理論とその論理構造—戸田貞三との対比で—」『社会学評論』115号 1978年 東京 日本社会学会
- 、「柳田国男の家族論」『家族研究年報』5号 1979年 東京 家族問題研究会
- Mohnhaupt;Heinz, ‘Verfassung(1)’ in “Geschichtliche Grundbegriffe” Bd.VI  
Hrg. Von Otto Brunner, Werner Conze, Reinhard Koselleck und  
Rudolf Walthe 1990 Stuttgart Klett-Cotta

牟田和恵、「日本型近代家族の成立と陥穽」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座現代社会学 19 <家族>の社会学』1996年 東京 岩波書店

Münkler;Herfried, ‚Staatsräson‘ in „Historisches Wörterbuch der Philosophie Band10“ 1998 Darmstadt Wissenschaftliche Buchgesellschaft

村上淳一、『近代法の形成』1979年 東京 岩波書店

———、『ゲルマン法史における自由と誠実』1980年 東京 東京大学出版会

———、『ドイツ市民法史』1984年 東京 東京大学出版会

村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎、『文明としてのイエ社会』1979年 東京 中央公論社

## N

中川善之助、『日本親族法—昭和十七年』1942年 東京 日本評論社

———、『随想 家』1942年 東京 河出書房

中根千枝、『タテ社会の人間関係』1967年 東京 中央公論社

中野卓、「同業街に於ける同族組織—京都二條薬種卸商同業街調査—」『社会学研究』第一卷第三輯 1948年 東京 高山書院

———、「都市に於ける同族と親類」戸田貞三博士還暦祝賀記念論文集『現代社会学の諸問題』1949年 東京 弘文堂

———、「労働組合に於ける人間関係—親方徒弟的組織に支配されるその一タイプ—」『社会学評論』第2巻第3号 1952年 日本社会学会

———、「北大呑村の社会構造—鱒大敷の村とその組合—」九学会連合編『人類科学』第6号 1953年

———、「鴨居瀬及び周辺地域の村落組織」九学会連合編『対馬の自然と文化』1954年 東京 古今書院

———、「商人社会—商家の歴史とその背景—」福武直編『日本の社会』1954年 東京 要書房

———、「都市調査」福武直編『社会調査の方法』1954年 東京 有斐閣

———、「農村社会調査法」『社会事業』第38巻第5号 1955年 東京 全国社会福祉協議会

———、「庵」九学会連合能登調査班編『能登—自然・文化・社会—』1955年 東京 平凡社

———、「家族と親族」『講座 社会学 第四巻 家族・村落・都市』1957年 東京 東京大学出版会

———、「北陸の定置網漁村」『村落社会研究会年報 V』1958年 東京 時調社

———、「家のイデオロギー」『講座 现代社会心理学 8 階級社会と社会変動』1959年 東京 中山書店

- 中野卓、「大和屋暖簾内資料抄」喜多野清一・岡田謙編『家—その構造分析—』1959年 東京 創文社
- 、「維新前夜の乱衆と家連合—お札降りとええじゃないか踊り—」『社会学評論』第10巻第2号 1960年 東京 日本社会学会
- 、「商家における同族の変化」『社会学評論』第12巻2号 1962年 東京 日本社会学会
- 、「漁場をめぐる村落社会の変化—近世の石高階層と現在の収入階層を手がかりとして—」九学会連合編『人類科学』第15号 1962年
- 、「方法の反省」九学会連合編『人類科学』第16号 1963年
- 、「漁協連合の協同経営と漁民組織」『村落社会研究会年報 IX』1963年 東京 時調社
- 、『商家同族団の研究—暖簾をめぐる家研究』1964年 東京 未来社
- 、「「地域」の問題と社会学の課題」『現代社会学講座 II』1964年 東京 有斐閣
- 、「『むら』の解体（共通課題）の論点をめぐってII」『村落社会研究』第2集 1966年 東京 塙書房
- 、「商業経営の主体—商家とその同族組織—」『社会経済史学』第31巻第6号 1966年 東京 社会経済史学会
- 、「大正期前後にわたる漁村社会の構造変化とその推進力—北大呑村鰯網再考—」『村落社会研究』第4集 1968年 東京 塙書房
- 、『家と同族団の理論 『商家同族団の研究』より』1968年 東京 未来社
- 、「村落社会の—研究方法—対馬・能登の漁村における研究事例に即して—」『村落社会研究』第8集 1972年 東京 塙書房
- 、「商家同族団」青山道夫・竹田旦・有地亨・江守五夫・松原治郎編『講座 家族 6 家族・親族・同族』1974年 東京 弘文堂
- 、「社会学的調査と「共同行為」」『UP』33号 1975年 東京 東京大学出版会
- 、「歴史社会学と現代社会—環境問題と歴史社会学的調査（その一）」『未来』101号 東京 未来社
- 、「社会学的調査における被調査者との所謂「共同行為」について—環境問題と歴史社会学的調査（その二）」『未来』102号 1975年 東京 未来社
- 、「社会学的な調査の方法と調査者・被調査者との関係—環境問題と歴史社会学的調査（その三）」『未来』103号 1975年 東京 未来社
- 、「環境と人間についての緊急調査と長期調査—環境問題と歴史社会学的調査（その四）」『未来』104号 1975年 東京 未来社
- 、『下請工業の同族と親方子方 「高度成長期」前におけるその存在形態』1978年 東京 御茶の水書房
- 、「北大呑諸村鰯台網再考」蒲生正男・下田直春・山口昌男編『歴史的文化像 西村朝日太郎博士古希記念』1980年 東京 新泉社
- 、『家と同族団の理論 第二版(上)(下)』1981年 東京 未来社

- 中野卓、「個人の社会学的調査研究について」『社会学評論』第32巻第1号 1981年  
東京 日本社会学会
- 、「村と生活史」『村落社会研究』第19集 1983年 東京 御茶ノ水書房
- 、「『中学生のみた昭和十年代』 1989年 東京 新曜社
- 、「『学徒出陣』前後 ある従軍学生のみた戦争』 1992年 東京 新曜社
- 、「『鯰網の村の四〇〇年』 1996年 東京 御茶ノ水書房
- 、「有賀先生の生涯と社会学」北川隆吉編『有賀喜左衛門研究＊社会学の思想・理論・方法＊』 2000年 東京 至文堂
- 中野卓編、『明治四十三年 ある商家の若妻の日記』 1981年 東京 新曜社
- 西川祐子、「比較史の可能性と問題点」『女性史学3』 1993年 向日 女性史総合研究会
- 、「『近代国家と家族モデル』 2000年 東京 吉川弘文館
- 日本人文学会編、『封建遺制』 1951年 東京 有斐閣
- NHK放送文化研究所編『現代日本人の意識構造 第五版』 2000年
- 農林省、「農山漁村経済更生計画ニ関スル農林省訓令」『農山漁村経済更生計画樹立方針』  
1932年 東京 農林省

## O

- 落合恵美子、『近代家族とフェミニズム』 1993年 東京 勁草書房
- 、「近代家族をめぐる言説」『岩波講座 現代社会学 19<家族>の社会学』  
1996年 東京 岩波書店
- 及川宏、「分家と耕地の分與—舊仙臺領増澤村に於ける慣行について—」『民族學年報』  
第一巻 1938年 東京 三省堂
- 、「同族組織と婚姻及び葬送の儀禮—舊仙臺領増澤村に於ける慣行に就いて—」  
『民族學年報』第二巻 1939年 東京 三省堂
- 、「所謂「まいりのほとけ」の俗信に就いて舊仙臺領増澤村慣行調査報告(三)—」  
『民族學年報』第三巻 1940年 東京 三省堂
- 、「『同族組織と村落生活』 1967年 東京 未来社
- 大門正克、『近代日本と農村社会』 1994年 東京 日本経済評論社
- 大竹秀男、「日本家族法史の課題—「家」と家父長制」『比較家族史研究1』  
1986年 東京 弘文堂
- 岡利郎、「大正期における法体系の再編と新しい法学の登場—「社会政治」との関連で—」  
石井紫郎編『日本近代法史講義』 1972年 東京 東京大学出版会
- 小笠原真、『日本社会学史への誘い』 2000年 京都 社会思想社
- 岡野昇一、「いわゆる「産業組合主義」の歴史的意義」高橋幸八郎・安藤良雄・近藤晃編『市  
民社会の経済構造』 1972年 東京 有斐閣
- 萩野美穂、「歴史学における構築主義」上野千鶴子編『構築主義とは何か』  
2001年 東京 岩波書店
- 萩生徂徠、「徂徠擬律書」『赤穂義人纂書補遺』 赤穂義人纂書補遺  
1912年 東京 国書刊行会

荻生徂徠、「政談」卷之四『日本思想体系 36 荻生徂徠』1973年 東京 岩波書店  
大橋薫、「同族並にその類縁概念」『ソシオロジ No.4』1953年 京都 社会学研究会  
大藤修、『近世農民と家・村・国家—生活史・社会史の視座から—』  
1996年 東京 吉川弘文館  
尾高朝雄、『國民主權と天皇制』1947年 東京 国立書院

## R

Riehl; Wilhelm Heinrich, „Die Familie“ 1925 Stuttgart J.G. Cotta  
—————, „Land und Leute“ 1899 Stuttgart J.G. Cotta  
—————, „Die bürgerliche Gesellschaft“ 1897 Stuttgart J.G. Cotta

## S

佐々木衛、「鈴木栄太郎「社会理論」再考」『山口大学文学会志』1981年 山口  
山口大学文学会  
Schutz; Alfred, ‘Common-sense and scientific interpretation of human action’ in  
“Collected Papers 1” edited and introduced by Maurice Natanson 1962 Hague M Nijhof  
佐藤健二、「家庭文化の歴史社会学にむけて」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・  
吉見俊哉編『岩波講座現代社会学 19 <家族>の社会学』1996年 東京  
岩波書店  
Schmitt; Carl, "Verfassungslehre" 1928 München und Leibzig Ducker&Humblot  
—————, “Der Begriff des Politischen, Text von 1932 mit einem Vorwort und drei  
Corollarien“ 1963 Berlin Duncker&Humblot  
Schwab; Dieter, 'Familie' in „Geschichtliche Grundbegriffe Bd.3“ hsg. von Otto Brunner,  
Werner Conze, Reinhart Koselleck und Rudolf Walthe 1975 Stuttgart Klett-Cotta  
盛山和夫、『制度論の構図』1995年 東京 創文社  
千田由紀、「『家』のメタ社会学：家族社会学における『日本近代』の構築」  
『思想』898号 1999年 東京 岩波書店  
—————、「家族社会学の問題構成—『家』概念を中心として—」『社会学評論』  
第50巻第1号 1999年 東京 日本社会学会  
—————、「構築主義の系譜学」上野千鶴子編『構築主義とは何か』  
2001年 東京 勁草書房  
—————、『日本型近代家族』2011年 東京 勁草書房  
滋賀秀三、『中国家族法の原理』1967年 東京 創文社  
清水幾太郎、「戸田先生のこと」『清水幾太郎著作集』第15巻 1993年 東京 講談社  
白石玲子、「日本近世・近代国家の法構造と家長権 近代の部 その二」『法制史研究』  
42号 1992年 東京 創文社

Sprandel; Rolf, "Verfassung und Gesellschaft im Mittelalter" 1978 Paderborn, München, Wien, Zürich Schöningh

砂川寛栄、『日本家族制度史研究』1925年 東京 中文館

鈴木栄太郎、「農村の社會學的見方」『大谷學報』1933年 京都 大谷學會

—————、『農村社會學史』1933年 東京 刀江書院

—————、「農村社會調査及び社會事業の單位としての部落」『社會事業』1934年 東京 中央社會事業協會

—————、「部落は大字なりや」『社會學』第二輯 1934年 東京 岩波書店

—————、「血縁に關する二つの方面」『社會學研究』第壹輯 1935年 東京 良書普及會

—————、「社會學より見たる聚落」『地理教育十周年記念 聚落地理学論文集』1935年 東京 地理教育研究会

—————、「日本のむらの分類に就いて」『社會學』第四輯 1936年 東京 岩波書店

—————、「農村社會の性格と農村社會事業」『共榮』第十卷第七号 1937年 福岡 福岡縣社會事業協會

—————、「我が國の農村社會の構造」『農業と經濟』1938年 京都 昭和堂

—————、「氏神の國家性に就いて」『共榮』第十一卷第八号 1938年 福岡 福岡縣社會事業協會

—————、「部落組織と共同作業」『帝國農會報』一一九卷八号 1939年 東京 帝國農會

—————、「農村社會指導原理私見」『共榮』第十二卷第十二号 1939年 福岡 福岡縣社會事業協會

—————、「日本に於ける農村協同體に就いて」『國民思想』第五卷十二号 1939年 東京 國民思想研究所

—————、「農村における勞力交換の慣習」『富民』一一卷一号 1939年 大阪 富民協會

—————、「農村における勞力交換の慣習(前承)」『富民』一一卷二号 1939年 大阪 富民協會

—————、『日本農村社會學原理』1940年 東京 時潮社

—————、「農村協同體の國家性」『北海道農會報』昭和十五年一月号 1940年 北海道 北海道農會

—————、「農村社會の國家的使命と農村工業」『農村工業』第九卷六号 1942年 東京 農村工業協會

—————、「家族生活の三つの型に就いて」『緑旗』第七卷第六号 1942年 京城 興亜文化出版

—————、「日本家族の特性」『緑旗』第八卷第四号 1943年 京城 興亜文化出版

—————、「皇國農家の特性」『農業と經濟』第十一卷第一號 1944年 東京 農業と經濟社

—————、「農村」田邊壽利編『社会学体系 都市と農村』1948年 東京 国立書院

—————、『鈴木栄太郎著作集』第一卷 1968年 東京 未来社



鈴木栄太郎、『鈴木栄太郎著作集』第二卷 1968年 東京 未来社  
——、『鈴木栄太郎著作集』第六卷 1969年 東京 未来社  
——、『鈴木栄太郎著作集』第四卷 1970年 東京 未来社  
——、『鈴木栄太郎著作集』第三卷 1971年 東京 未来社  
——、『鈴木栄太郎著作集』第五卷 1973年 東京 未来社  
——、『鈴木栄太郎著作集』第八卷 1975年 東京 未来社  
——、『鈴木栄太郎著作集』第七卷 1977年 東京 未来社  
鈴木栄太郎・喜多野清一、『日本農村社会調査法』1948年 東京 国立書院  
鈴木栄太郎・喜多野清一、『農村社会調査』1952年 東京 時潮社

## T

竹内利美、「初期研究の出発点—「郷土調査要目・民俗」—」柿崎京一・黒崎八州次良・  
間宏編『有賀喜左衛門研究』1988年 東京 御茶の水書房  
武笠俊一、「有賀社会学の成立と展開」『社会学評論』第29巻第4号 1979年 東京  
日本社会学会  
——、「系譜関係と親方子方関係」『社会学評論』第32巻第4号 1982年 東京  
日本社会学会  
——、「有賀喜左衛門の『白樺』派時代」『社会学評論』第37巻第3号 1986年  
東京 日本社会学会  
——、「実証研究における理論的飛躍について」『村落社会研究』第11巻第1号  
2004年 東京 御茶ノ水書房  
建部遯吾、『普通社会学第一巻 社会学序説』1905年 東京 金港堂書籍  
——、『現代社会問題研究 第1巻 現代社会文明論』1920年 東京 冬夏社  
建部遯吾・戸田貞三、『現代社会問題研究 7巻 私有財産問題』1922年 東京 冬夏社  
建部遯吾編、『現代社会問題研究 第24巻 国家社会観』1921年 東京 冬夏社  
田原嗣郎、「『仁政』の思想と『御家』の思想」『思想』第六三三号 1977年 東京 岩波書店  
暉峻衆三編、『日本の農業150年』2003年 東京 有斐閣  
戸田貞三、「日本に於ける家の制度發達の研究」『日本社会学院年報』第一年  
第一・二合冊 1913年 東京 日本社会学院事務所  
——、「何故細民が出来るか」『社会と救済』第一巻三号 1917年 東京  
中央慈善協会  
——、「生活調査法について」『救済研究』第七巻6号 1919年 東京  
救済事業研究会事務所  
——、「米國に於いて社会学及社会問題を中等学校の生徒に教授する事に關する從來  
の経過」『日本社会学院年報』第八年第一・二合冊 1920年 東京  
日本社会学院事務所  
——、「跋論」建部遯吾編著『現代社会問題研究 24巻 国家社会論』1921年 東京  
冬夏社

- 戸田貞三、「社会的方面」『日本社會學院年報』第一〇年第三・四合冊 1923年 東京 日本社會學院事務所
- 、「バラック生活の改善事項」『太陽』第二九卷一三号 1923年 東京 博文館
- 、「社會に關する事項」『公民教育講演集』1924年 東京 実業補習教育研究會
- 、「夫婦關係の強さの測定」『社會學雜誌』第一号 1924年 東京 日本社會學會
- 、「親子中心の家族の特質」『思想』第三四号 1924年 東京 岩波書店
- 、「家系尊重の傾向に就て」『丁酉倫理會倫理講演集』第二六三輯 1924年 東京 大日本圖書
- 、「日米兩國に於ける夫婦結合の強さに関する比較」『統計時報』第九号 1924年 東京 帝国地方行政學會
- 、「故外山教授の『神代の女性』に就いて」『社會學雜誌』第九号 1925年 東京 日本社會學會
- 、「家族結合と社会的威圧」『哲學雜誌』第四〇卷四五九号 1925年 東京 有斐閣
- 、「親子の結合に就いて」『社會學雜誌』第一七号 1925年 東京 日本社會學會
- 、「家族的生活者と非家族的生活者」『社會政策時報』第六二号 1925年 東京 協調會
- 、「階級的內婚制に就いて（上・下）」『社會學雜誌』第二一・二二号 1926年 東京 日本社會學會
- 、「家族構成に就いて」『統計時報』第一四号 1926年 東京 帝国地方行政學會
- 、「社會政策と連帶責任」『社會政策時報』第六八号 1926年 東京 協調會
- 、『家族の研究』1926年 東京 弘文堂書房
- 、「家族の特性としての員数限定の傾向」『我等』第九卷一号 1927年 東京 岩波書店
- 、「夫婦結合分解の傾向に就いて(一)(二)(三)」『社會學雜誌』第三三・三四・三五号 1927年 東京 日本社會學會
- 、「閥の社會的特質」『社會學雜誌』第四〇号 1927年 東京 日本社會學會
- 、「一九二七年に於ける日本の社會學界」『經濟往來』第二卷一二号 1927年 東京 日本評論社
- 、「自然の人口と人工の人口」『社會學雜誌』第四五号 1928年 東京 日本社會學會
- 、「自然の人口と人工の人口（承前）」『社會學雜誌』第四七号 1928年 東京 日本社會學會
- 、『社會學講義案 第一部』1928年 東京 弘文堂
- 、「家族」『大思想 エンサイクロペヂャ』第一三冊 1928年 東京 春秋社
- 、「昭和三年社會學界」『經濟往來』第三卷一二号 1928年 東京 日本評論社
- 、「臺灣の人と社會」『社會學雜誌』第六八号 1929年 東京 日本社會學會
- 、「夫婦本位の結婚」『經濟往來』第五卷四号 1930年 東京 日本評論社
- 、「家族の集團的特質の變遷過程」『理想』第一九号 1930年 東京 理想社

- 戸田貞三、「愛郷心と教員生活」『郷土』第五号 1931年 刀江書院
- 、「都市農村」『季刊 社會學』第一輯 1931年 東京 天地書房
- 、『社會政策』 1931年 臺北 臺灣社會事業協会
- 、「拡まる文化社會學」『帝國大學新聞』第四一三号 1932年 東京 帝国大学新聞社
- 、「家族の集團的特質」『社會學』第二号 1932年 東京 森山書店
- 、「社會變動の一局面」『經濟往来』第七卷八号 1932年 東京 日本評論社
- 、『社會學 岩波講座 哲学』1932年 東京 岩波書店
- 、現代中學公民教科書 上・下』1932年 東京 杏林堂
- 、「社會調査」『岩波講座 教育科学』第一八冊 1933年 東京 岩波書店
- 、『農村人口問題』1933年 東京 大日本聯合青年団
- 、「家族制度の改造」『社會政策時報』第一五四号 1933年 東京 協調會
- 、『社會學講義案 第二部』1933年 東京 弘文堂
- 、『社會調査』1933年 東京 時潮社
- 、『家族と婚姻』1934年 東京 中文館書店
- 、「事実上の婚姻と法律上の婚姻」『家族と婚姻』1934年 東京 中文館書店
- 、「家族の集團的特質」『家族と婚姻』1934年 東京 中文館書店
- 、「家族と外部社會」『學校教育』第二六四号 1935年 福岡 学校教育研究会
- 、「家族の大きさ—東北地方の家族とその他の地方の家族—」『社會政策時報』第一七四号 1935年 東京 協調會
- 、「社會調査概説(一)~(六)(完)」『社會事業』第一八卷一、二、三、四、五、六号 1935年 東京 社會事業研究所
- 、「生計單位としての家族」『中央公論』第五〇卷九号 1935年 東京 中央公論社
- 、「家族構成と人口」『經濟法律論叢』第七卷一号 1936年 東京 専修大学学会
- 、「家族生活と子供の再認識」『児童』第四卷二号 1936年 東京 刀江書院
- 、「社會生活」『日本文化講座』第一一輯 1937年 東京 帝国教育會
- 、「現代我國民の形造つて居る家族の形態に就いて」『社會學』第五輯 1937年 東京 岩波書店
- 、「新要目に於ける家の生活の意味」『公民教育』第七卷七号 1937年 東京 公民教育研究所
- 、「農村の人口問題」『農村講座 (農村問題十講)』 1937年 東京 日本放送協会
- 、『家族構成』1937年 東京 弘文堂書房
- 、『新制中學公民教科書 上・下』1937年 東京 中文館書店
- 、「村を離れる人々」『丁酉倫理會倫理講演集』第四二八輯 1938年 東京 大日本圖書
- 、「村における「まき」の機能」『日本諸學振興委員會研究報告 第二篇(哲学)』1938年 東京 文部省教学局

- 戸田貞三、「宗門帳に於て觀られる家族構成員」『家族と村落』第一輯 1939年 東京 日光書院
- 、「公人關係と私人關係」『公民教育』第九卷五号 1939年 東京 公民教育研究所
- 、「長期建設と婦人」『丁酉倫理會倫理講演集』第四四〇輯 1940年 東京 大日本圖書
- 、「日本の家族問題講話」『公論』第四卷三号 1941年 東京 第一公論社
- 、「日本社會學會を中心として」『社會學』第八輯 1941年 東京 岩波書店
- 、「家族」『倫理学』第八冊 1941年 東京 岩波書店
- 、「我が國の家族と家族制度」『家庭教育指導叢書』第四輯 1942年 東京 文部省社會教育局
- 、「家の道」1942年 東京 中文館書店
- 、「家族の機能と子供の扶養との關係」『民族科学研究』第一輯 1943年 東京 朝倉書店
- 、「家族社會學」『日本國家科學体系』第二卷「哲學及社會學」 1944年 東京 実業之日本社
- 、「家と家族制度」1944年 東京 羽田書店
- 、「社會調査の方法と技術」『輿論調査』1946年 東京 時事通信社
- 、「古代の住居趾と家族の大きさ」『社會科學評論』第一・二集合併号 1948年 東京 関書院
- 、「社會調査」民族文化調査會編『社會調査の理論と實際』1948年 東京 青山書院
- 、「建部先生の思い出」『社會學研究』第二卷一集 1948年 東京 国立書院
- 、「家族と社會」1948年 東京 印刷局
- 、「家族の構成と機能」田邊壽利編『社会学体系 家族』1948年 東京 国立書院
- 、「社會教育法と民間社會教育團體」『社會と教育』第四卷八号 1949年 東京 社會教育研究會
- 、「社會的矛盾と反社會的行為」『月刊刑政』第六一卷二号 1950年 東京 刑務協會
- 、「社會教育の隘路」『社會と教育』第五卷三号 1950年 東京 社會教育研究會
- 、「家庭生活」1950年 東京 六三書院
- 、「家族制度」1950年 東京 三省堂
- 、「社會學概論」1952年 東京 有斐閣
- 、「學究生活の思い出」『思想』第三五三号 1953年 東京 岩波書店
- 、「『戸田貞三著作集』第一卷～第一五卷 1993年
- 戸田貞三監修、『高校社会科概説』1952年 東京 日本出版協同
- 戸田貞三・甲田和衛、『社會調査の方法』1949年 東京 学生書房
- 戸田貞三編、『社會學研究の栞』1949年 東京 中文館書店
- 戸田貞三・鈴木栄太郎監輯、『家族と村落』第一輯 1939年 東京 日光書院

- 戸田貞三・鈴木栄太郎監輯、『家族と村落』第二輯 1942年 東京 日光書院  
 戸田貞三、『戸田貞三著作集』第一巻～第十五巻 1993年 東京 大空社  
 富永健一、「鈴木栄太郎の社会学理論」『現代社会学研究』第二号 1989年 北海道  
 北海道社会学会  
 ———、『日本の近代化と社会変動』1990年 東京 講談社  
 ———、『社会学講義』1995年 東京 中央公論社  
 富永健一、『近代化の理論』1996年 東京 講談社  
 ———、『社会変動の中の福祉国家』2001年 東京 中央公論社  
 ———、『戦後日本の社会学』2004年 東京 東京大学出版会  
 鳥越皓之、「有賀理論における生活把握の方法」『トカラ列島社会の研究』  
 1982年 東京 御茶ノ水書房  
 利谷信義、『家族と国家』1986年 東京 東京大学出版会

## U

- 上野千鶴子、『家父長制と資本制』1990年 東京  
 ———、「日本型近代家族の成立」『近代家族の成立と終焉』1994年 東京 岩波書店  
 ———、「ポスト冷戦と「日本版歴史修正主義」日本の戦争責任資料センター編  
 『シンポジウム ナショナリズムと「慰安婦」問題』1998年  
 ———、『ナショナリズムとジェンダー』1998年 東京 青土社  
 内田隆三、「ソフトな管理の変容—家庭の生成と臨界点」『岩波講座・社会科学の方法VIII シ  
 ステムと環境世界』1993年 東京 岩波書店

## W

- 我妻栄、『親族法・相續法講義案』1938 東京 岩波書店  
 ———、『家の制度 その倫理と法理』1948 東京 酣燈社  
 ———、『民法研究 VIII 憲法と私法』1970年 東京 岩波書店  
 和田宗樹、「オオヤケとワタクシの階層的相互転換—日本の社会関係の特質—」『哲学』  
 116集 2006年 東京 慶応義塾大学  
 渡辺秀樹、「多様性の時代と家族社会学—多様性をめぐる概念の再検討」  
 『家族社会学研究』第25巻第2号 2013年 東京 家族社会学セミナー  
 渡辺祥子、『近世大阪 葉種の取引構造と社会集団』2006年 大阪 清文堂出版  
 渡辺浩、『東アジアの王権と思想』1997年 東京 東京大学出版会  
 ———、『日本政治思想史』2010年 東京 東京大学出版会  
 Weber; Max , "Wirtschaft und Gesellschaft Die Stadt Max Weber Gesamt Ausgabe  
 I /22-5 “ 1999 Tübingen J.C.B.Mohr  
 ———, ‚Hausgemeinschaften‘ in „Wirtschaft und Gesellschaft Gemeinschaften  
 Max Weber Gesamt Ausgabe I /22-1“ 2001 Tübingen J.C.B.Mohr

Weber; Max , "Wirtschaft und Gesellschaft Herrschaft Max Weber Gesamt Ausgabe  
I /22-4 “ 2005 Tübingen J.C.B.Mohr  
————— , "Wirtschaft und Gesellschaft Soziologie Max Weber Gesamt Ausgabe  
I /23 “ 2013 Tübingen J.C.B.Mohr

## Y

柳田國男、「聳入考」『三宅博士古希祝賀記念論文集』1929年 東京 岡書院  
柳田國男編、『山村生活の研究』1937年 東京 民間伝承の会  
山之内靖、「ウェーバー都市論の方法的視座」高橋幸八郎・安藤良雄・近藤晃編『市民社会  
の経済構造』1972年 東京 有斐閣  
山室周平、「戸田貞三の家族学説—初期における家族史の研究を中心に—」『家族史研究 4』  
1981年 東京 大月書店  
山本起世子、「民法改正にみる家族制度の変化」『園田学園女子大学論文集』第47号  
2013年 兵庫 園田学園女子大学  
好本照子・福田はぎの、『家政学概論』1990年 東京 朝倉書店  
米村昭二、「家族研究の動向」『社会学評論』110号 1997年 東京 日本社会学会  
米村千代、『「家」の存続戦略—歴史社会学的考察—』1999年 東京 勁草書房  
—————、「家族社会学における家族史・社会史研究」『家族社会学研究』第23卷  
第2号 2011年 東京 家族社会学セミナー  
—————、『「家」を読む』2014年 東京 弘文堂

## Z

Zweig;Stefan, "Joseph Fouché “ 1981 Frankfurt am Main S.Fischer

## 論文の内容の要旨

論文題目 日本社会学における家理論の形成と展開—その社会像と政治観  
氏名 齊藤史朗

日本の社会学における家研究は1920年代に始まり、そのピークを作った学者達の死により1980年代はじめに一区切りをつけたが、その後に現れた新しい理論である近代家族論および家=株論は、過去の家研究をひとくくりに、「非政治的」なものとして自分たちの「政治的」な研究と対照的に捉えている。

家と政治の関係は振り返ってみれば、日本では古く遡ることのできるトピックであった。遅くとも鎌倉時代の『愚管抄』以降、家は政治の基軸をなすものとして語られ続けてきた。近代になっても民法典論争において争われたように、家は国家や政治と深く結びついて語られてきた。新しい家の理論が正しいとすれば、社会学における家の理論は、家族国家観が盛んに語られた戦前においても、「非政治的」なものだったのだろうか。

ここから本論の課題が生じる。すなわち、第一に問われるべきは、本当に社会学における家理論は、戦前期においても「非政治的」であったのかどうかということである。

第二に問われるべきは、こうした理解—戦前期の議論を戦後の議論とともに「非政治的」であると評価すること—がいつ、どのようにして生まれたものなのかということである。社会学における家理論が、その誕生の時からずっと「非政治的」であったというのは、新しい理論が自らの議論の新しさを強調するためにそう主張したのか、あるいはそれ以前から、そのような観方が存在したのかを確認しなければならない。

そして第三に問われるべきは、社会学における家理論が、戦後のものばかりでなく、戦前に展開されたものもまた非政治的であったという学説史的理解が形成されるのに大きな影響を与えた要因としては何が考えられるのかということである。

このような問いに答えるためには、政治そのもの、そして家を議論するということと、

政治ということの関係をしっかりと捉えておかなければならない。

以下、本論では政治とは国家の統治にかかわる事項を指すこととする。また、本論の対象とする五人の社会学者、戸田貞三、鈴木栄太郎、有賀喜左衛門、喜多野清一、中野卓が家語るそれぞれの議論の中に、こうした意味での政治を探すという作業にとどまらず、各論者がそもそも人と人、人と集団や集団同士の関係についてどのようなイメージを持っているのかという社会像を基礎として、政治に対してどのような構えや態度を取っているのかという政治観を探ることをもって上記の三つの課題に答えて行く。

戸田の家族論、とりわけ家長的家族の議論から明らかになる社会像は、精神的融合を軸とするものであった。家族が精神的融合の範囲にとどまり、それがゆえに小家族とならざるを得ないのと同様に、戸田の捉える社会もまた、その範囲は極めて狭いものであった。精神的融合を作り出すことのできる家族が唯一社会的関係の成り立つ世界であり、家族の外の世界は食うか食われるかの非社会的世界なのである。

こうしたそれぞれの狭い社会を統合するのは、上位の権力の支配によるのであり、戸田の考える社会においては、すべての個人や集団はより公のものを重視することにより、上位の権力に抵抗することなく従うものとされているのである。戸田は集団を個人へと還元することにより、国家以外の集団について、個人を超えた集団としての存在を認めないので、それぞれの集団のとり姿はその時々国家の与える諸条件によることになる。こうした見方は家や家族などのあり方を捉える際の柔軟な見方を可能にするとともに、国家の支配に対する従属をもたらすことになるのである。

鈴木が考える社会像は、平等という価値に基づいている。そして平等という価値を重視するがゆえに、鈴木は当時の民法における家督相続の規定に反対し、嫡男の総取りをやめて他の兄弟姉妹にも一定の権利を認めるべきことを主張した。そしてその平等は村の生活においては、政治的権利、公民権としての平等として主張された。

鈴木による平等の主張は、政治に参加する条件としての平等というよりも、政治に参加することによって平等を獲得するという色彩が強くなっている。これはある段階までは旧来の不平等の下で、支配されていた人々が政治的参加によって平等を獲得するという機能を果たしたであろう。しかし、それがある限界を超えると、人々に平等な参加を強いるようになり、過剰な参加は体制への包摂を意味するようになったのである。

有賀は統治権力およびその作用のことを「公法的」と呼んでいる。家は公法的なものから区別して考えられているのだが、それは全くの無干渉・無関係という意味ではない。有賀は家を形成する社会関係の中核として親方子方関係を重視しているが、その成立の端緒として有賀が考えていたのは、公領を押領して私領とすることであった。すなわち、家は「公法的」なものとの対抗によって生み出されたというのである。

有賀の理解する家とは直接的に統治権力と関わるものではないのだが、家に属する人々を自然災害や政治権力の荒波から守るための防波堤として捉えられていた。その限りで、むしろ政治と深い関係を持つものだったのである。

このように、戦前の家理論は決して「非政治的」なものではなかった。(第一の課題への答え)

政治と密接な関係を持っていた戦前の家理論が、「非政治的」なものとして理解されるようになったのは、それぞれの議論を展開していた論者たちの弟子たちによってであった。



(第二の問いへの答え)

喜多野と中野がそれぞれ戸田理論について、本質論と構成論という『家族構成』の内容にのみよる叙述を行ったために、戸田理論が狭く捉えられ、その政治性を見失った理解が強化された。

喜多野は鈴木理論の特徴をもっぱら理論の中で語り、その背景にある実践的意図については全く考慮しなかった。鈴木が戸田が集団として家族を捉えることを批判し、家や村に存在する「統合性」を精神や規範と呼ぶことに込めた、平等を獲得するための政治参加については問うことがなかったのである。こうした観点を受け継いだ学説史は、鈴木の家理論の観念性を、一般の家・家族論に対して特異なものとしてのみ理解することになった。

有賀喜左衛門の家理論が戦前の議論をも含めて「非政治的」と理解されるようになった一つの大きな原因は、有賀・喜多野論争によってであると思われる。有賀の議論は有賀・喜多野論争というフィルタを通ることによって、非親族成員を家の固有の成員と認めるのか、それとも「擬制」として認めるにすぎないのかという、親族論という視角から理解されることとなった。

喜多野や中野による先人達の議論の「非政治化」は、彼ら自身の議論が「非政治的」であることによっても強化された。(第三の問いへの答え)

喜多野が同族関係を具体的な支配の関係とは独立のものとするのは、戦後改革による厳しい批判から同族関係、ひいては家というものを守ることを意味した。その過程で喜多野は、支配の持つ具体的な歴史的関係を家と同族から排除する理論化を行い、家と同族を親族関係と理解する道を開いた。こうして家とは、具体的な歴史を捨象して、ただ続いているということ価値とするものとして受け止められることとなった。

中野にとっての家の本質とは、主家家族と奉公人との心と心のふれ合いであり、戸田の家理論と精神的融合という意味では同一であった。こうした親密な関係を保証する領域を明らかにすることこそが社会学の役割であるとして、中野は生活の領域を重視する。しかし、有賀が上位権力の支配に対して家の成員の生活保障の領域を作り出すことに注目するのに対して、中野はこうした領域を所与のものとして捉え、そのあり方や質、すなわち政治と切り離された生活を問題としてきたのである。

喜多野や中野の理論の形成には戦後の社会のあり方が大きな影響を与えていたと思われる。1960年代から70年代にかけて、日本では政治とは利権の分配争いであると捉えられ、エコノミック・アニマルと言われるような、政治とは無縁な経済活動が盛んである一方で、一億総中流と言われるような形での平等が実現していた。そこでは、統治としての政治によって作られた、「家庭」と言われるプライベートな親密空間としての「生活」が、それを作り出した政治とは無縁なものとして謳歌されていた。

この時代、一方では喜多野が政治的・歴史的要素を排除する家理論を形成するとともに、中野は喜多野に対抗しながらも、喜多野によって政治的・歴史的要素が排除された場を「生活」で埋める理論を形作っていた。彼らの家の理論には戦前に戸田が展開したような、素朴に政治に追従してしまうような議論もなければ、鈴木のように積極的に政治に参加する主張も見られなかった。また、有賀のように権力の圧力から自律した領域を作り出すという意味での政治の領域も顧みられることはなかった。そして、こうした理論を色眼鏡として、過去の議論を振り返ることが行われるようになったのである。(第三の問いへの答え)